

閣商第一五二號

外交轉換ニ伴フ液体燃料供給對策ニ關スル件

本邦液体燃料ノ供給ニ關シテハ支那事變勃發以來國際情勢ノ變化ニ伴ヒ萬一ノ場合ニ備フル爲數次ノ繰上及特別輸入ヲ實施シタルガ民間貯油ハ石油業法ニ基ク義務保有量ノ域ヲ多ク越ユルコトヲ得ズ他方國產原油及人造石油ノ増産モ銳意努力シツツアルモ既往ニ於テハ急速ニ成果ヲ擧ゲ得サリシ爲國內自給率ハ依然トシテ向上セサル實情ナリ

然ルニ今次日獨伊軍事同盟ノ成立ハ英米ノ對日經濟壓迫ヲ逐次強化

スルコト必定ナルベキヲ以テ外油ノ輸入杜絶スルコト有ランカ國內
消費規正ヲ一層強化スルモ民需約々八月ヲ支ヘ得ルニ過ギズ加之既
ニ米國ヨリノ高級航空揮發油及同潤滑油並同生産機械類ノ輸入ハ禁
止セラレ一朝有事ノ秋ニ想到セバ眞ニ寒心ニ堪ヘザル實情ナリ

仍テ政府ハ今次ノ外交轉換ヲ契機トシ國際情勢ニ即應スル爲國內
石油資源ノ開發、油槽船船腹ノ擴充、代用燃料ノ確保、石油工業經營ノ合
理化、消費規正ノ強化ヲ行フハ勿論、特ニ人後石油事業ノ劃期的振興
ニ依ル國內自給率ノ向上、蘭印及北樺太石油ノ確保、外油ノ急速輸

日本標準規格 B-4 小筆納

人ニ依ル國內貯油ノ増加等ニ關シ別紙要綱ノ達成ニ努メ、以テ我國
 液体燃料ニ對スル最低限度ノ自給ヲ急速實現致度
 右閣議ヲ請フ

昭和十五年十二月二十六日

商工大臣 小林 一

内閣總理 近衛 文
 大臣公爵



新
 二
 省

外務大臣 松岡洋

大藏大臣 河田

陸軍大臣 東條英

海軍大臣 及川古志郎



日本標準規格 B-4 小筆納

INT. 654.

114

内閣總理大臣公爵 近衛文麿 殿

拓務大臣 秋田



百
一
三

外交轉換ニ伴フ液体燃料供給對策要綱

一、人造石油事業ハ別冊人造石油政策要綱ニ基キ既定計畫二百萬軒ノ完成促進ニ努ムルト共ニ昭和二十年ニ於テ生産四百萬軒ヲ確保スルコトヲ目標トスルコト

但シ資材等ノ情況ニヨリ完成年度ニ遲延ヲ生スルコトアルベキモノトス

二、關内石油ノ取得量ヲ更ニ増加確保スル如ク資源開發及買油條件ノ確立ニ努ムルコトトシ取得量ハ昭和十六年度三百五十萬軒昭和

二十年度五百萬坪以上ヲ目標トスルコト

三 北樺太ニ於ケル石油利権ノ確保ノ方法ヲ講ジ之ガ増産ヲ圖ルコト

トトシ目標ヲ百萬坪トスルコト

四 國內貯油量ノ増加ヲ可及的迅速ニ圖ルコト

之ガ爲貯油量ハ石油業者ノ義務貯油量ノ概ネ二倍半トスルコトヲ

目標トシ資金、油槽船、貯油設備ニ對シ可及的重點ヲ置クコト

了解事項

人造石油政策要綱實施ニ當リテハ次記諸項ニ依ルモノトス

一、資材ニ關シテハ昭和十六年度及十七年度ニ於テ本計畫ヲ順當ニ遂行スルニ要スル額ノ配當困難ナリト豫想セラルルヲ以テ減額ノコトアルベキモ、之ガ配給ニハ特別ノ考慮ヲ拂ヒ以テ本計畫最終目標ノ達成ヲ期スルモノトス

二、資金計畫ニ關シテハ、本事業ノ國家的使命、非營利的本質、並ニ金融界ノ實情等ヲ考慮シ、本計畫達成ニ必要ナル資金ヲ支障ナク

調達シ得ル様具体的ニ考慮スルモノトス

但シ資金ノ實際調達ハ物動計畫ノ實施ト相照應セシムルコトトシ、
且ツ事業會社ノ資金ハ極力民間資金ノ吸收ニ努メ、帯然ノ資本金
ノ拂込、社債ノ調達ハ可及的之ヲ抑制スルコトニ努ムルモノトス

人 造 石 油 政 策 要 綱

第 二 章

IMT. 654.

120

目次

第一	要旨
第二	計畫概要
第三	保護政策
第四	政策實施ニ對スル日滿兩國調整方針
第五	支那ニ於ケル工場建設方針

第一要 旨

昭和十二年確定セラレタル人造石油製造事業振興計畫ハ昭和十八年
度ニ於テ日滿兩國ヲ通ジ揮發油及重油各百万坪ヲ生産シ、コノ兩種
油ニ付日本國需要ノ半額ヲ自給セントスルモノナリシガ、右計畫ハ
立案當時ニ於テハ、所要資金、資材、人員、採算等ノ企業形成ノ諸要
素竝ニ製品々種別收率等未ダ充分ニ判明シ居ラザリシ爲、一部推定
ヲ加味シテ案盡セラレタル次第ナルガ、右計畫實施ニ着手以來既ニ
三箇年余ヲ經過シ、此間建設及ビ操業ノ實績ヲ確メ、製造技術ノ進
歩ヲモ見タルヲ以テ、企業形成ノ諸要素モ大凡判明シ來レルト共ニ
立案當時考慮セラレザリシ航空用揮發油、潜水艦用及自動車用等

ゼル油、航空用潤滑油等ノ優良製品ノ生産可能ナルコトモ確認セラ
 レ、新業ハ茲ニ企業トシテノ基礎確立スルニ到レルモノト認メラル
 而シテ最近内外情勢ノ急變ハ液体燃料自給國策ノ強化ヲ益々必要ト
 スルト共ニ、使用側諸機械ノ急速ナル發達ハ液体燃料ノ質ニ關スル
 要求ニ相當顯著ナル變革ヲ來タセルヲ以テ、此際人進石油事業ノ既
 計畫實施ノ實績ニ立脚シ、生産、配給、使用、保障政策等ヲ一貫セ
 ル日滿綜合計畫ノ見地ニ於テ新業ノ振興計畫ヲ強化更新シ、之ガ實
 施ニ依リ液体燃料自給國策ノ實現ニ資セントス

第二 計畫概要

一、地 域

工場ノ建設及生産ハ日滿兩國ニ亘リ一元的計畫ニ依リ實施スルモノトス

但シ支那ニ於ケル斯業ハ今後本計畫中ニ包含セシムルコトトシ、之ガ實施ハ「第五 支那ニ於ケル工場建設方針」ニ據ルモノトス
ニ工場立地及生産能力計畫

昭和二十年度ニ於テ約四〇〇萬軒ノ生産ヲ確保スルモノトス
右ニ對スル工場立地及生産能力計畫ハ、凡ユル角度ヨリ檢討シ實施ノ確實性アルモノニ付、重點主軸ニ則リ現存工場ノ擴張ヲ主ト

スルコトトシ、一應次表ノ如ク豫定スルモノトス
 但シ之ガ實施ニ當ツテハ物動計畫ノ決定ト建設ノ實情トヲ勘案シ、
 本計畫最終目標ヲ迅速且ツ有利ニ達成スル機修正ヲ行フト共ニ、
 製造技術ノ採擇等ニ關シ万全ノ措置ヲ講ジ、以テ工場ノ廉價建設
 並ニ經濟操業ノ實現ヲ期スルモノトス

工場立地及生産能力計畫表（單位 万坪）

註

- A、既設又ハ現ニ建設中ノ工場
- B、新規増設工場

商 工 省	日											會 社 名	工 場 所 在 地	生 產 目 標
	地 內													
	三 井 計	日 產	宇 部 油 化	尼 人	東 邦	東 京 瓦 斯	日 本 油 化	北 人 油			會 社 名			
	三 池	若 松	宇 部	尼 崎	名 古 屋	橫 濱	川 崎	計	劍 路	留 萌	瀧 川			
	五 五	一	一	一 〇	一	二	一	三 二	〇	九	二 三	▲		
	七 四	〇 三	一 〇	一 〇 八	〇	〇	二	五 一	三 〇	二 一	〇	B		
	一 二 九	四	一 四	一 八	一	二	三	八 三	三 〇	三 〇	二 三	A B 計		

日 滿 總 計	滿 洲						本 外 地					
	滿 洲 合 計	鞍 燃	滿 燃	滿 鐵	滿 洲 油 化	吉 林 人 石	日 本 合 計	計	朝 鮮 石 炭	三 菱 油 化	樺 油	
		鞍 山	錦 縣	油 頁 岩	石 炭 液 化	四 平 街			吉 林	灰 岩	內 嶼	內 洲
一 九 三	一 一 一	〇	四	七 五	一	一	三 〇	八 二	二 七	二 〇	二	五
二 〇 八	一 〇 四	一 〇	六	〇	一 八	〇	七 〇	一 〇 四	三 〇	一 〇	〇	二 〇
四 〇 一	二 一 五	一 〇	一 〇	七 五	一 九	一	一 〇 〇	一 八 五	五 七	三 〇	二	二 五

日本標準規格 B-4 小筆納
IMT. 654. - 127

三、生産目標

本計畫完成後ノ品種別、數量別ノ年間生産目標ハ現在ノ處一應次
配ノ如ク概定スルコトトス

但シ今後製造技術ノ進歩ト需要側要求ノ推移トニ伴ヒ、實施ニ當
リ適當ニ之ヲ調整スルモノトス

航空用基揮發油	五五万軒
自動車用揮發油	一二五万軒
輕質チーセル油	七五万軒
重質チーセル油	六〇万軒
焚燃用重油	六五万軒

航空用潤滑油

一〇万軒

一般潤滑油

一〇万軒

計

四〇〇万軒

右ノ外航空用配合燃料ノ増産ニ關シテハ今後極力之ガ實現ニ努ムルモノトス

以上ノ中輕質チーゼル油ハ現在猶活用ヲ見ルニ到ラザルモ、之ガ使用ニ依ルチーゼル機關ハ揮發油機關ニ比シ燃料消費量僅カニ六割程度ニ過ギザル爲、チーゼル機關ノ實用化促進ニ伴ヒ燃料ノ生産額及使用額ヲ著シク節減シ得ラルルヲ以テ、本計畫ト並行シテチーゼル自動車ニ對スル國策ヲ確立シ、速カニ之ヲ實行ニ移シ、

以テ本計畫ニ依リ生産セラルル輕質ディーゼル油ノ有效ナル利用ヲ
 行ヒ、燃料ノ生産及使用チ一貫セル國家經濟ノ改善ヲ期スルモノ
 トス

四 所要資金

本計畫遂行ニ要スル資金次ノ如シ

總	額	十九億八千万圓
昭和十五年	度末迄ノ投資豫定額	四億四千万圓
昭和十六年	度以降ノ所要額	十五億四千万圓
右ノ中	株式引受等ニ依ル投資豫定額	四億五千万圓
燃料ノ既資金計畫中ヨリノ出資餘力額		一億圓

以上ノ差引新規所要資金額

九億九千万圓

右ノ外支ニ對スル所要見込資金
三億圓中半額ヲ日本國人造石油側
ヨリ投資スルモノトシテ

一億五千万圓

鑄局新規ニ資金計畫ヲ要スル額

十一億四千万圓

右新規ニ資金計畫ヲ要スル額十一億四千万圓ニ對シテハ、今後極力民間投資ノ吸收ニ努ムルト共ニ、本事業ノ國家的使命、非營利的本質、民間既投資ノ實情並ニ現下金融市場ノ情勢等ニ鑑ミ、此際帝國燃料興業株式會社ノ資金計畫ヲ強化擴充スル等必要ナル資金調達ノ途ヲ確立シ本政策ヲ遂行スルモノトス

兵工場建設所要資材

本計畫遂行ニ要スル普通鋼材大約次ノ如シ

但シ資材ノ實際配給ニハ特別ノ考慮ヲ拂ヒ以テ本計畫最終目標ノ

達成ヲ期スルモノトス

總額 一五萬噸

昭和十五年度末迄ノ配給豫定額 三三萬噸

昭和十六年度以降ノ所要額 八二萬噸

六運轉用所要資材

本計畫實施ノ爲運轉用所要資材中特ニ考慮ヲ要スルモノ次ノ如シ

石炭 (計畫完成後ノ所要年額) 約一五〇〇萬噸

電力 (計畫完成後ノ所要額) 約四〇萬キロワット

コバルト（計畫完成迄ノ累計所要額）

約一四〇〇 噸

右ノ中

原料炭ニ關シテハ既計畫實施中ノ各工場關係炭礦ノ開發及ビ出炭ノ増加ヲ促進スルト共ニ全石炭所要額ヲ日滿ヲ通ズル石炭ノ總括的需給計畫中ニ包含セシムル様措置スルモノトス

電力ニ關シテハ各工場毎ニ具體的ニ買電又ハ自家發電ヲ案書實施スルト共ニ、内外地滿洲各地域別ノ總括的需給計畫中ニ之ヲ包含セシムル様措置スルモノトス

合成法觸媒用コバルトニ關シテハ世界ノ產額僅少ナルト現下ノ實際情勢トニ因由シ當面ノ入手困難ナルモ極力之ガ收得ニ努ムルト

共ニ、既ニ成果ヲ得ツツアル代替開採ノ工業化ヲ實現スルモノト
ス

ト所要人員

本計畫遂行ニ要スル工場人員大約次ノ如シ

技術者 勞務者

現在人員 一七〇〇 六六〇〇

今後整備時迄ニ採用ヲ要スル人員 三一〇〇 一八四〇〇

整備時ニ於ケル合計人員 四八〇〇 二五〇〇〇

八以上各項ノ外本政策實施上必要ト認ムル諸方策中

(一)工場建設ニ要スル裝置機械類ノ工作ニ關シテハ、

缺陷工作力ヲ急速整備充實スルト共ニ、工作業者ノ分野化、装置機械類ノ標準化等ヲ行ヒ工作技術ノ育成向上及工作能率ノ増進ヲ實現シ、以テ工場建設ニ支障ナカラシムルコトトシ

(二) 研究實驗ニ關シテハ

現存研究機關ノ連絡協力ヲ強化スルト共ニ綜合研究機關ノ設置ニ依ル研究ノ統括的實施ニ付テモ考慮スルコトトシ以テ全研究實驗ヲ有效適切ナラシメ、技術ノ改良進歩ニ依ル生産能率ノ増進、生産原價ノ低減、並ニ製品品質ノ優良化等ヲ實現スルト共ニ、建設及操業ニ必要ナル技術、装置、機械、資材等ノ中從來外國ニ依存シ來レルモノハ此際急速ニ國內技術ヲ完成シ斯業ノ

完全ナル獨立ヲ實現セシムルモノトス

奇
二
三

第三 保 護 政 策

現行獎勵金制度ハ之ヲ廢止シ、代フルニ價格政策ニ依ルコトトシ、人造石油製品ハ事業ニ適當ナル利潤ヲ加味セル適正價格ヲ公定シ、石油共販株式會社ヲシテ總括的ニ購入セシメ、更ニ天然石油製品トノ價格プール制ニ依リ品種別製品ノ販賣價格ヲ公定シ之ガ販賣ヲナサシムルコトトシ、國費ノ支出ニ依リ石油販賣價格調節ノ要アル場合ハ石油共販株式會社ニ對シ一括シテ調節資金ヲ交付スルコトトス猶ホ公定價格ハ新ニ委員會ヲ設置シ其ノ審議ニ基キ政府ニ於テ毎年之ヲ決定スルコトトスルコト

理由

本政策實施ニ依ル生産單價ハ技術ノ進歩ト相俟ツテ次第ニ低減セラルルコト必定ナルモ、本計畫整備直後ヲ豫想スルニ、製品總額約四〇〇万軒生産ニ要スル總經費ハ大凡七億七千万圓ニシテ、之ト略ボ全様ノ製品ヲ天然石油製品ノ輸入ニ俟ツ場合ハ大凡五億圓ノ外貨拂ヲ必要トス

而シテ本政策ハ國防、産業、經濟等ノ綜合國策ノ見地ヨリ速力ニ液体燃料ノ外國依存ヲ脱却スル爲之ガ緊急實施ヲ要スル次第ナルガ、單ニ經濟的見地ヨリスレバ本政策實施ニ伴ヒ右ノ如ク年額約五億圓ノ外貨拂ヲ防遏シ得ルコトトナルモ、前記生産及輸入ノ價格約二億七千万圓ハ國內ニ於テ負擔スルヲ要スルモノナルヲ以

テ、コノ負擔額ニ對シ安當適切ナル保護政策ノ確立ヲ必要トス
而シテ現行保護政策ハ、天然石油製品ノ課税ニ依ル間接保護ト、
事業法第九條ニ基ク獎勵金ノ交付ニ依ル直接保護トヲ併用セルモ
ノニシテ、コノ政策ヲ繼續スル場合本計畫整備直後ニ於テハ、前
記要保護額二億七千万圓ヨリ製品總額四〇〇万軒ニ現税率ヲ適用
スルモノトセル課税該當額約一億二千万圓ヲ控除セル額、即チ約
一億五千万圓ノ獎勵金ヲ必要トス

而シテ斯ノ如キ巨額ノ獎勵金ヲ國費ノ支出ニ俟ツハ事實上困難ナ
ルノミナラズ、之ヲ品種別、工場別ニ交付スルコトハ專横的ニ課
ル煩雜トナリ、且ツ外地滿洲ヨリノ移輸入品ニ對スル保護ヲモ確

立スル必要アルヲ以テ、之等ノ實施ヲ直裁簡明ナラシメ、併セテ
斯業保護ニ關スル國家ノ方針ヲ一層徹底セシムル爲獎勵金制度ニ
代フルニ價格政策ニ依ラントスルモノナリ
而シテ本制度ノ利點トスル處次ノ如シ

(一) 人造石油保護ニ關スル國家ノ負擔ト石油製品實需者ノ負擔ト
自由ニ調整シ得ルコト

(二) 人造石油製品ハ常ニ適正價格ヲ確保スルコトニ依リ營業者ヲ
テ安ンジテ斯業ニ邁進セシメ得ベク、斯業ノ振興ヲ期シ得ル
ト

(三) 製品ノ品種別數量別ニ付國家ノ必要トスル生産統制ヲ行フコト

ニ依リ、工場ノ製品種別生産ニ偏倚ヲ來タスコトアルモ、共販
購入價格ヲ品種別ニ適當ニ調整公定スルコトニ依リ全業者ノ適
正利潤ヲ確保シ得ルコト

四 石油製品ノ販賣價格ハ人造石油ノ増産ニ伴ヒ徐々ニ上昇セシメ
得ルト共ニ他方將來製造技術ノ進歩ニ依ル人造石油生産原價ノ
低減ヲモ豫期シ得ルヲ以テ、結局石油市價ノ急激且ツ異常ナル
騰貴ヲ避ケ得ベク、從ツテ低物價格政策ノ遂行ニ支障ヲ來タサ
ザルコト

五 製品別販賣價格ノ相互關係ヲ燃料使用額ノ要領ニ即スル様適切
ニ調整シ、以テ燃料ノ生産使用ヲ一貫セル最モ經濟的ナル政策

ト
ヲ實行シ得ルコト、例へばディーゼル自動車振興政策上ノ絕對條
件トセラレツツアル揮發油價格ニ對スルディーゼル油價格ニ適當
ナル低比率ヲ維持セシムルガ如キハ、之ヲ容易ニ實施シ得ルコ

第四 政策實施ニ對スル日滿兩國調整方針

本政策ノ實施ニ對スル日滿兩國調整ノ方針ハ次記ニ依ルモノトス

(一)工場ノ建設ハ一元的計畫ニ依リ實施スルモノトス

(二)滿洲國ニ於テ生産スル製品ノ處分ニ關シテハ陸海軍ノ直接調整ヲ排除シ、殘餘ノモノハ之ヲ折半シテ一半ハ滿洲國ノ需要ニ當テ、一半ハ之ヲ日本國ニ輸入スルコトヲ原則トス

但シ之ガ實施ニ當ツテハ全石油製品ニ對スル兩國ノ需要、竝ニ輸入生産配給等ノ實情ニ基キ兩國政府間ニ於テ毎年協議ヲ行ヒ最モ有利トスル具体案ヲ決定實施スルモノトス

(三)日滿兩國ガ相互輸入スル製品ニ對スル新案ノ保護ハ之ヲ需要國側

ニ於テ賃辦スルヲ原則トシ、滿洲國製品中日本國ニ輸入スルモノ
ニ付テハ、日本國內生産品ヲ石油共販株式會社ヲシテ購入セシム
ル方針ニ準ジ全社ヲシテ適正價格ヲ以テ購入セシメ、プール計算
ニ依リ之ヲ販賣セシムルモノトス

第五 支那ニ於ケル工場建設方針

支那ニ於ケル工場ノ建設ハ本計畫中ニ包括案畫スルコトトシ、人造石油事業ニ充當シ得ベキ資金、資材、工作力、技術者等ノ工場建設力ト、液体燃料ノ全供給計畫ニ基ク要望トニ鑑ミ、日漸支ヲ總括シテ新設又ハ擴張セントスル各工場ニ對スル立地條件ノ順位ヲ檢討ノ上實行ニ移スモノトス但シ資金ニ關シテハ差當リ前項ノ所要資金計畫ニ記載ノ通り措置シ之ガ準備ヲナスモノトス

說 明

本邦液體燃料ノ供給源ニ關シテハ其ノ九割ヲ外油ニ依存シ、國內自給率甚ダシク低劣ナル爲、昭和九年石油業法制定ト共ニ所謂義務保有制度ヲ設ケ、石油業者ヲシテ毎年輸入數量ノ二分ノ一ヲ常時保有セシムルコトトシタリ。然レ共之ヲ以テハ一朝有事ノ場合充分ナラザルヲ以テ、支那事變勃發直後國際情勢ノ急變ニ應ジ協同企業株式會社ヲ設立シテ約八〇万屯ノ特別輸入ヲ行ヒタルガ之ハ其ノ後軍ニ買収セラレタリ。

昭和十四年ニ於テハ日米通商航海條約廢棄通告ニ對處センガ爲、特別線上輸入ヲ實施シタルモ之亦昭和十五年度物動計畫ニ繰入レテ民需配給ニ消費シタルガ爲、貯油ノ増加ヲ來シ居ラザルナリ。然ルニ日米關係ハ惡化ノ一途ヲ辿リ改善ノ曙光ダニ認メラレザリシヲ以テ昭和十五年度ニ於テモ調整線上輸入及特別輸入ヲ實施シタルガ其中途ニ於テ即チ本年七月二十六日米國政府ハ層鐵同様石油ノ一部ニ付テモ輸出許可

制ヲ採ル旨發表シ八月一日ヨリ之ヲ實施シタリ。許可制度ノ對象トナ
リタルハ石油製品及「テトラエチル」鉛ナルガ其ノ内容ハ差當リ

(イ) 航空揮發油トシテハーガロンニ對シ三〇・〇迄ノ「テトラエチル」
鉛ヲ添加セバオクタン價八七ヲ超ユルモノ及蒸溜セバ右ノ製品
ヲ三%以上採取シ得ル原油

(ロ) 航空潤滑油

(ハ) 「テトラエチル」鉛

トセラレ而シテ右ノ品ハ許可ヲ受クレバ輸出シ得ルコトトハナリ居ル
ト雖西半球以外ヘノ輸出ヲ認メザルコトトセラレタルヲ以テ日本ニ對
シテハ實際上輸出禁止トナリテ、右以外ノ原油、重油及石油製
品ニ付テハ之ガ輸出ニ許可ヲ要セズトセラル。許可制ノ實施ノ狀況ヲ
見レバ特殊ノモノ例ヘバ九二オクタン價以上ノ航空揮發油以外ハ許可
シツツアリ。然レ共此等ノ禁止及許可制ノ範圍ハ今後益々擴大ノ虞多
大ナルヲ以テ引續キ特別輸入及調整輸入ノ實施ニ努メ來リタルガ、從

來備船シ居リタル外國油槽船數ハ減少スル一方ニシテ甚シキ油槽船船腹ノ不足ノ爲、所期ノ如ク實行シ得ズ、今日ニ於テモ民間貯油ハ、石油業法ニ基ク義務保有量一〇八三〇〇〇罇ノ外ニ特別輸入量三二三〇〇〇罇ノ増加ヲ來シタルノミナルヲ以テ、貯油トシテハ合計約一四一萬罇ニ過ギザルナリ。從ツテ現状ニ於テハ一朝事アル秋我國民需液體燃料ノ供給ハ

貯油（右二四一萬罇ヲ製品換算）

國產天然石油ヨリノ製品	年産	約	一二八萬罇
人造石油撫順頁岩油ハ除外）	年産	約	三五萬罇
無水酒精	年産	約	一〇萬罇

合計

一八三萬罇

ニ依ツテ賄ハザルベカラズ。

然ルニ一ケ年民需最低必要量ハ約二七三萬罇ナルニ依リ右ヲ以テハ僅ニ約七ヶ月ヲ支ヘ得ルニ過ギザルナリ。依テ他方更ニ消費規正ノ強

化ニヨリ貯油ノ増加ニ努メツツアリト雖之亦今日トシテハ之以上ノ強化ハ困難ト認メラル。

一方日獨伊軍事同盟成立ニ因リ對米關係ハ益々惡化シツツアリテ歐洲大戰戰局ノ推移如何ニ依リテハ、英米協同ニ依ル對日禁輸ノ實現スルコト莫キヲ保セス、又國際情勢ノ激變何時勃發スベキヤ測リ難シ、從ツテ最惡ノ事態ヲ顧慮スルトキ寔ニ寒心ニ堪ヘザル次第ナリ。

故ニ外交轉換ヲ契機トシテ國策遂行ヲ遺憾ナカラシムルガ爲ニハ、我國ノ最大弱點トスル液體燃料供給ニ付之ガ對策ノ樹立ヲ急務トス。然ルニ國內ニ於ケル天然石油及人造石油ノ増産ニハ自ラ限度アリ且ツ相當ノ時日ヲ要シ今直ニ之等ヲ期待スルコト能ハザルヲ以テ、外國ヨリ石油ヲ速ニ輸入シ以テ貯油ノ増加ヲ計ルコト刻下ノ緊急事ナリトス。然ラバ此ノ貯油ノ目標ヲ如何ニスベキヤ 問題トナルベキモ、國內生産ト院ミ合セテ、最少限度ニケ年間自給自足シ得ルコトヲ必要ト思料スラル。蓋シ有事ノ際、南方地域ノ石油資源ニ付假リニ其主要油田ハ

産油五〇万吨以上七鑽區、産油二〇万吨以上一六鑽區一ガ破壊セラレタル場合ハ、其ノ恢復ニハ相當ノ時日ヲ要スベク、最大ノ努力ヲ以テモ相當量ノ出油ヲ見ルニハ二年以上ヲ要スベキヲ以テ、少ク共國産油ト併セテ二ケ年間自給自足シ得ルヲ目途トシテ貯油ヲ爲スコト緊要ナリ。仍テ石油業者ノ義務貯油量ノ概ネ二倍半ノ貯油ヲ達成セントス。尙之ヲ達成スル期間ニ付テハ資金、油槽船及貯油設備ニ關シ可及的重點ヲ置キ其ノ限度ニ於テ出來得ル限り急速ニ實施スルコトトセントス。右ノ外油輸入ニ因ル國內貯油ノ増加ハ緊急對策ナルガ更ニ根本對策トシテハ、日滿支チ一環トシ且大東亞ヲ包容シタル自給自足ノ共榮圈ヲ確立シ、其圈内ニ於ケル資源ニ基キ國防經濟ノ自主性ヲ確保スルノ方策ヲ樹立スルコトヲ要ス。

翻テ日滿ヲ通シ軍官民ノ今後ニ於ケル石油需要量ハ幾何ニ上ルベキヤト謂フニ燃料局ニ於テ調査シタル處、軍需ハ平時需要トシ官民需ハ現在程度ノ消費規正ヲ行フモノトノ想定下ニ於テ、昭和十八年ニ約九二〇万疋、昭和二十年度ニ於テハ約一、二〇〇万疋ニ達スル結果トナレリ。而シテ右一、二〇〇万疋ノ内閣ハ民間取得軍需約三〇〇万疋、滿洲約一〇〇万疋、日本官民需約七二〇万疋ニシテ、右軍需中ニハ航空揮發油約六〇万疋、航空潤滑油約一〇万疋ヲ含ムコトハ最も重要視スベキ點ナリトス。

産油五〇万吨以上七鑽區、産油二〇万吨以上一六鑽區一ガ破壊セラレタル場合ハ、其ノ恢復ニハ相當ノ時日ヲ要スベク、最大ノ努力ヲ以テモ相當量ノ出油ヲ見ルニハ二年以上ヲ要スベキヲ以テ、少ク共國産油ト併セテ二ケ年間自給自足シ得ルヲ目途トシテ貯油ヲ爲スコト緊要ナリ。仍テ石油業者ノ義務貯油量ノ概ネ二倍半ノ貯油ヲ達成セントス。尙之ヲ達成スル期間ニ付テハ資金、油槽船及貯油設備ニ關シ可及的重點ヲ置キ其ノ限度ニ於テ出來得ル限り急速ニ實施スルコトトセントス。右ノ外油輸入ニ因ル國內貯油ノ増加ハ緊急對策ナルガ更ニ根本對策トシテハ、日滿支チ一環トシ且大東亞ヲ包容シタル自給自足ノ共榮圈ヲ確立シ、其圈内ニ於ケル資源ニ基キ國防經濟ノ自主性ヲ確保スルノ方策ヲ樹立スルコトヲ要ス。

翻テ日滿ヲ通シ軍官民ノ今後ニ於ケル石油需要量ハ幾何ニ上ルベキヤト謂フニ燃料局ニ於テ調査シタル處、軍需ハ平時需要トシ官民需ハ現在程度ノ消費規正ヲ行フモノト想定下ニ於テ、昭和十八年ニ約九二〇万坪、昭和二十年度ニ於テハ約一、二〇〇万坪ニ達スル結果トナレリ。而シテ右一、二〇〇万坪ノ内國ハ民間取得軍需約三〇〇万坪、滿洲約一〇〇万坪、日本官民需約七二〇万坪ニシテ、右軍需中ニハ航空揮發油約六〇万坪、航空潤滑油約一〇万坪ヲ含ムコトハ最も重要視スベキ點ナリトス。

後述スルガ如ク東亞共榮圈ニ於ケル石油供給源ノ貧弱ナル爲、前述ノ石油需要量ニ對シテハ相當ノ壓縮ヲ加フルヲ要スルヲ以テ種々研究ノ結果、昭和十八年度ニ於テ五九六万トン、昭和二十年度ニ於テ七二九万トンナシ其内譯中民間取得軍需ヲ一九七万トン、滿洲八六万トン、官民需四四五万トンナシタルナリ。然レ共右昭和二十年ニ於ケル七二九万トン中ニハ、軍ガ直接輸入スルモノハ包含セザルコト及支那ニ於ケル需要ニ付テモ考慮スルトキハ昭和二十年度ノ日滿支ヲ通ズル石油總需要量ハ一千万トンニ達スルモノト思料セラル。

仍ツテ右一千万トンノ供給ヲ確保スル爲、之ガ供給源ヲ索ムレバ次ノ四ニ歸ス。

- 一 國內天然石油及代用燃料
- 二 北極太石油
- 三 蘭印石油
- 四 人造石油

北樺太ニ於ケル石油利権鑛區ヨリハ昭和十四年度迄ニ既ニ約二〇五
万噸ノ採油ヲナシ年産約二〇万噸ノ時代モアリタルヲ以テ、利権遂行
が完全ナラバ年産約一〇〇万噸程度ノ採油ハ可能ト思料セラレ寔ニ有
望ナル 資源ノ一ニシテ、日英國交調整ニ依リ完全ナル利権遂行ノ一
日モ速カナランコトヲ期セザルベカラナルナリ。

蘭印石油ニ關シテハ、今日迄ノ交渉ニ依リ買油及鑛區獲得ヲ見、昭
和十六年度ニ於テハ二五〇万噸ヲ取得シ得ル見込ニ達シタリト雖、之
ヲ以テハ不充分ニシテ今後ノ交渉ニ依リ、昭和十六年度ニ三五〇万噸
ヲ買油スルコト及昭和二十年度ニ五〇〇万噸以上ヲ獲得スルコトハ經
對必要ト思料セラレ且此程度ナラバ可能ナリト思料ス。蘭印石油鑛區
ノ獲得セシモノニ付テハ速ニ之ガ開發ヲ促進スルコト必要ナリトス。
以上國內天然石油、酒精、北樺太石油、蘭印石油ヲ合計スルモ昭和二
十年産ニ於テ約六〇〇万噸ヲ達ギズシテ前記需要額千万噸ニ對シ尙四
〇〇万噸ノ不足アルノミナラズ、其ノ品質ニ於テ軍需ノ航空揮發油六

〇万坪、航空潤滑油一〇万坪ノ要求ヲ充足スルコト到底不可能ナルヲ免レザルナリ。

然ルニ人造石油事業ノ既往ノ經驗ニ徴スルニ昭和二十年度ニ於テ年産四〇〇万坪ノ生産ヲ圖ルコトハ相當ノ困難ハ伴フベシト雖國策トシテ之ヲ強行スルニ於テハ決シテ不可能ナラザルノミナラス然モ液體燃料需給上絶對必要トスル次第ニシテ若シ資材等ノ情況ニ依リ人造石油事業完成年度ノ遲延ヲ來スコトアラバ其レ丈液體燃料ノ需給上缺陷ヲ來ス次第ナリ。尙人造石油ヨリ高級航空揮發油及同潤滑油ヲ製造シ得ルコトハ確實ナリトス。

茲上ノ次第ニシテ現下ノ情勢上此ノ際特ニ人造石油製造事業ノ劃期的振興、北樺太石油ノ確保、蘭印石油ノ確保及國內貯油量ノ増加ノ方策ヲ確立急施シ以テ我國液體燃料供給對策ヲ樹立スルコトノ急務タルニ於テ茲ニ閣議ヲ稟請スル所以ナリ。

厚甲第一三號

案起

昭和十五年三月五日

閣議決定 昭和十五年三月二十六日 施行

昭十五年三月三十日 公布

內閣總理大臣



內閣書記官



內閣書記官



外務大臣



陸軍大臣



文部大臣



遞信大臣



厚生大臣



內務大臣



海軍大臣



農林大臣



鐵道大臣



大藏大臣



司法大臣



商工大臣



拓務大臣



別紙兩院ノ議決ヲ經タル職業紹介法中改正法律 案ヲ審査スルニ右ハ貴族院



議長上奏ノ通裁可ヲ奏請セラレ可然ト認ム

上諭案

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル

職業紹介

法中改正法律

ヲ裁可シ茲ニ之ヲ

公布セシム

御名 御璽

昭和十五年三月二十九日

内閣總理大臣

厚生大臣

法律第七十四號

(上奏ノ通)

内閣

中貴族院ハ兩院ノ議ヲ經タル
職業紹介法中改正法律案
ノ裁可ヲ奏請ス

昭和十五年三月二十四日

中貴族院議長伯爵松平賴壽



職業紹介法中左ノ通改正ス

第七條 削除

第十四條中「町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ」ヲ削ル

附則

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

職業紹介法中改正法律案

右衆議院ノ議決ヲ經タル政府提出案本院ニ於
テ可決セリ依テ御執奏相成度議院法第三十一
條ニ依リ此段申進候也

昭和十五年三月二十四日

貴族院議長伯爵松平賴壽



内閣總理大臣米内光政殿

職業紹介法中改正法律案

右衆議院ノ議決ヲ經タル政府提出案本院ニ於
テ可決セリ依テ御執奏相成度議院法第三十一
條ニ依リ此段申進候也

昭和十五年三月二十四日

貴族院議長伯爵松平賴壽



内閣總理大臣米内光政殿



職業紹介法中改正法律案帝國議
會へ提出ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十五年二月二十一日

内閣總理大臣米内光政



厚甲一三

二月三十一日

昭和十五年二月二十一日

内閣書記官長

内閣書記官

和

佐

五

内閣總理大臣 五

法制局長官



外務大臣

盛

陸軍大臣

房

文部大臣

山

逓信大臣

勝

厚生大臣

茂

内務大臣

若

海軍大臣

厚

農林大臣

五

鐵道大臣

田

大藏大臣

梅

司法大臣

堂

商工大臣



拓務大臣

有

別紙厚生大臣請議職業紹介法中改

正法律案

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

法制局

閣議決定帝國議會ニ提出セラレ可然ト認ム

法律案

呈案附箋ノ通

内閣總理大臣

法律案

明治二十一年一月一日

職業紹介法中改正法律案

右

勅旨ヲ奉シ帝國議會ニ提出ス

昭和十五年二月二十一日
衆

内閣總理大臣

厚生大臣

法制局厚第一三號

昭和十五年二月十二日

此ノ件關係主任官
厚生書記官 青木重臣

厚生省發職第五號

職業紹介所ノ事務ノ現況ニ鑑ミ職業紹介所及聯絡委員ニ關スル費用ノ地方負擔ヲ
廢止スルノ要アリト認ム

仍テ別紙職業紹介法中改正法律案ヲ第七十五回帝國議會ニ提出セントス
右閣議ヲ請フ

昭和十五年二月十日

厚生大臣 吉田

茂



內閣總理大臣 米內光政 殿

厚甲一三

厚生省

出



職業紹介法中左ノ通改正ス

第七條 削除

第十四條中「町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ」ヲ削ル
附則

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

職業紹介法中改正法律案理由書

職業紹介所ノ事務ノ現況ト地方負擔トノ介所及聯絡委員ニ關スル費用ノ地方負擔ヲ

改正ヲ要スルモノアリ是レ本案ヲ提出スル所以ナリ

参照

○職業紹介法

昭和十三年四月
法律第六十一号

(總理厚生大臣副署)



第七條 職業紹介所及聯絡委員ニ關スル費用ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ道府縣ヲシテ其ノ一部ヲ負擔セシムルモノトス
地方長官必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ前項ノ規定ニ依リ道府縣ノ負擔スル費用ノ一部ヲ市町村ヲシテ負擔セシムルコトヲ得

第十四條 町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本法中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

職業紹介法中改正法律案ニ関スル参考資料目次

一 職業紹介法

二 職業紹介法施行令

一 職業紹介所ニ関スル經費ノ市町村負担ニ関スル要項

二 昭和十五年及ニ存續スト假定シタル職業紹介所ニ関スル經費地方

負担金調

三 昭和十四年及職業紹介所經費各費目別地方負担金調

四 昭和十四年及職業紹介所經費地方負担額總括

五 昭和十四年及職業紹介所經費地方負担額調（一般職業紹介所）

六 昭和十四年及職業紹介所經費地方負担額調（國家總動員諸費分）

七 昭和十四年及職業紹介所經費地方負担額調（勞務動員諸費分）

八 昭和十四年及職業紹介所ニ関スル經費地方負担概算見込額直存

縣別調（失業急急施設費分）

九

昭和十三年以職業紹介所ニ関スル經費負担命令状況

X 一 職業紹介所經費之地方負担ニ関スル陳情書及意見書提出ノ件

X 二 職業紹介所ニ関スル

一、職業紹介所ニ関スル經費ノ市町村負担

担ニ関スル要項

(十三年十二月省厚生省令第六號)

(一) 職業紹介法施行令第三條ノ規定ニ依リ道府

縣ノ負担スル費用ノ一部ヲ市町村ニ負担

シムルハ道府縣ノ財政上必要ナル場合又ハ

市町村ノ財政著シク良好ナル場合ニ限ルコ

ト

(二) 施行令第三條但書ノ規定ニ依リ職業紹介所

ノ設置セラレタル市町村以外ニ道府縣ノ負担

スル費用ノ一部ヲ負担セシムルコトヲ得

ルハ職業紹介所出張所ノ設置セラレタル市

町村又ハ職業紹介所ノ設置セラレタル市町

村ニ隣接セル市町村ニシテ職業紹介所ノ利

同一道府縣内ノ市町村ニ対スル負担割合
ハ必ずシモ同一ナルコトヲ要セザルコト

(四) 施行令第三條但書ノ規定ニ依リ道府縣ノ負担スル金額ノ一分ノ一ニ相当スル金額ヲ超

エテ負担セシムルコトヲ得ルハ財政著シク

良好ナル市町村從來公立職業紹介所ニ関シ
支出シタル純負担額ニ比シ著シク負担軽減

トナル市町村又ハ其ノ職業紹介所ニ付特別
ノ經費ヲ要スル職業紹介所ニ設置セラレタ

ル市町村ニ限ルコト但シ此ノ場合ニ於テモ
從來職業紹介所ヲ設置シタル市町村ニ対ス

ル負担額ハ(三)ノ範囲ニ止ムルコト
(五) 市町村ニ対シ負担ヲ命ズル時期ハ決算後夕

ト ヲ ノ 町 上 ノ ル
 超 頁 村 減 結 ヲ
 ュ 担 担 少 課 防
 ル ス 頁 シ 頁 ゲ
 ト ル 担 タ 担 デ
 キ 金 額 額 基 ル
 ハ 額 額 本 本 配
 市 額 額 費 費 賦
 所 額 額 費 ヲ 予
 村 額 額 費 ヲ 算
 頁 額 額 費 ヲ 依
 担 額 額 費 ヲ 依
 額 額 額 額 依
 ヲ 額 額 額 額 依
 更 額 額 額 額 依
 半 額 額 額 額 依
 ス 額 額 額 額 依
 ル 額 額 額 額 依
 ヲ 額 額 額 額 依

昭和十五年年度ニ存續スル假定シタル
職業紹介所ニ関スル経費地方負担金調

職業部
(百一三八)

区	分	基本予算額		備考
		査定概算	負担率	
經常部	職業紹介所	二九七七一八六	二分一四九八五九三	予算額中機械工補導施 設費一五二六四七〇円ヲ含ム
	臨時部	三〇四八五五九	四分一七六一三九	
臨時部	職業紹介事業諸費	二五九五五五七	六四八八八九	
	勞務動員諸費	八六九二七九	二七三一九	
臨時部	國民登録諸費	一〇六四七	二六六一	
	勞務者雇傭規制諸費	六五二四〇四二	一六三二〇〇八	
合計		九五二一一二二八	三一二九六〇一	

		昭和十四年度職業紹介所經費各費目別地方負担金調			
科目	區分	予算額	負担率	地方負担額	備考
經常部	職業紹介所	三〇〇〇七七一	$\frac{1}{2}$	一五〇〇三八五	
臨時部	職業紹介事業諸費	二九九八五五九	$\frac{1}{4}$	七四九六三九	
	計	五九九九三三〇	$\frac{3}{4}$	二二五〇〇二四	
臨時部	國民登録諸費	八六九二七九	$\frac{1}{4}$	二一七三一九	
臨時部	勞務者雇傭規制諸費	一〇六四七	$\frac{1}{4}$	二六六一	
臨時部	失業進急施設費	二一一〇六七四	$\frac{1}{4}$	五二七六六九	
臨時部	勞務動員諸費	五三五四四〇	$\frac{1}{4}$	一三三八六〇	
	計	三、五二六、四〇〇	$\frac{1}{4}$	八八一五〇九	
合計	合計	九、五二五、三八〇		三、一三一、五三三	第三準備金七月 半分及追加三算 一ヶ月分合算

昭和十四年度職業紹介所經費地方負担額總括

區分	費目別				費目別				總經費
	一般	國家總	國民登錄	計	一般	國家總	國民登錄	計	
德府縣	一〇〇	一〇〇	一〇〇	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	三〇〇	一〇〇
北海	九三〇	二二〇	二二〇	一三七〇	八九五〇	五四〇	八〇	一三九〇	一七〇
青森	九三〇	五七〇	四八九〇	一七〇〇	三三九〇	八〇	三三〇	三三〇	三三〇
岩手	一〇〇	四八九〇	四八九〇	一〇〇	六八〇	八七〇	三三〇	一〇〇	三三〇
宮城	一〇〇	四八九〇	四八九〇	一〇〇	六八〇	八七〇	三三〇	一〇〇	三三〇
秋田	九〇	六八〇	六八〇	一三三〇	二六六〇	一三五〇	二四九〇	二四九〇	二四九〇
山形	九七	二八〇	二八〇	一三三〇	二四三〇	七四〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
福島	一三〇	三八〇	三八〇	一三三〇	三三九〇	一六三〇	三三九〇	三三九〇	三三九〇
茨城	一〇〇	八三〇	八三〇	一三三〇	二四七〇	一五三〇	二四七〇	二四七〇	二四七〇
栃木	九三	七三〇	七三〇	一三三〇	二五六〇	一三〇〇	二五六〇	二五六〇	二五六〇
群馬	一〇〇	七三〇	七三〇	一三三〇	二五六〇	一三〇〇	二五六〇	二五六〇	二五六〇
神奈川	二九	八三〇	八三〇	一三三〇	三三九〇	二〇九〇	三三九〇	三三九〇	三三九〇
東京	六六	六三〇	六三〇	一三三〇	三三九〇	四七〇	三三九〇	三三九〇	三三九〇
千葉	二九	八三〇	八三〇	一三三〇	三三九〇	二〇九〇	三三九〇	三三九〇	三三九〇
埼玉	一一	七九〇	七九〇	一三三〇	二〇九〇	一三〇〇	二〇九〇	二〇九〇	二〇九〇
群馬	一〇	七三〇	七三〇	一三三〇	二五六〇	一三〇〇	二五六〇	二五六〇	二五六〇
新潟	一八	三二〇	三二〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
富山	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
石川	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
福井	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
山梨	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
長野	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
岐阜	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
靜岡	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
愛知	一六	三六〇	三六〇	一三三〇	二四三〇	一三〇〇	二四三〇	二四三〇	二四三〇
總計	一〇〇	一〇〇	一〇〇	三〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	三〇〇	一〇〇

昭和十四年度職業紹介所費地方負担額調

(一般職業紹介所)

行政区分	配賦豫算額		負担率	地方負担額	経常部		臨時部	
	上	下			上	下	上	下
北海道	二九三、七九〇		二九、六	八六、九五〇	五七、九七〇		二八、九八〇	
青森	九三、一八〇		二五、〇	二六、六五〇	一五、五三〇		七、七六〇	
岩手	一〇六、六二〇		"	一六、六五〇	一七、七七〇		八、八八〇	
宮城	一〇〇、四五〇		"	一五、一〇〇	一六、七三〇		八、三七〇	
秋田	九〇、六八〇		"	一四、六〇〇	一五、一〇〇		七、五〇〇	
山形	九七、二八〇		"	一四、三〇〇	一六、二〇〇		八、一〇〇	
福島	一三〇、三八〇		"	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
茨城	一〇一、八三〇		二七、五	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
栃木	九三、一〇〇		"	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
群馬	一〇二、九三〇		"	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
埼玉	一一一、七九〇		二九、六	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
千葉	一一九、八一〇		二九、六	一五、四〇〇	一七、三〇〇		八、八〇〇	
東京	一六六、三〇〇		六〇、〇	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
神奈川	一八三、二〇〇		五〇、〇	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
新潟	一六五、三六〇		二九、六	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
富山	一六二、三四〇		"	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
石川	一六五、七一〇		"	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
福井	一五〇、四一〇		"	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
山梨	一五二、八一〇		二五、〇	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
長野	一三九、二三〇		二七、五	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
岐阜	一四四、一三〇		二九、六	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	
静岡県	一四二、六三〇		"	二六、六五〇	二七、三〇〇		一三、三〇〇	

七

昭和十四年度職業紹介所費地方負担額調
 (一四、一二、二一)

道府県	市	町	村	支庁	道庁	合計
北海道	札幌	旭川	釧路	帯広	旭川	23.8%
青森県	青森	八戸	弘前	五戸	青森	20.1%
岩手県	盛岡	水沢	奥州	盛岡	20.1%	
宮城県	仙台	石巻	仙台	仙台	20.1%	
秋田県	秋田	横手	秋田	秋田	20.1%	
山形県	山形	酒田	山形	山形	20.1%	
福島県	福島	郡山	福島	福島	20.1%	
茨城県	水戸	土浦	水戸	水戸	20.1%	
栃木県	宇都宮	宇都宮	宇都宮	宇都宮	20.1%	
群馬県	前橋	前橋	前橋	前橋	20.1%	
千葉県	千葉	千葉	千葉	千葉	20.1%	
東京都	東京	東京	東京	東京	20.1%	
神奈川県	横浜	横浜	横浜	横浜	20.1%	
新潟県	新潟	新潟	新潟	新潟	20.1%	
富山県	富山	富山	富山	富山	20.1%	
石川県	金沢	金沢	金沢	金沢	20.1%	
福井県	福井	福井	福井	福井	20.1%	
山梨県	山梨	山梨	山梨	山梨	20.1%	
長野県	長野	長野	長野	長野	20.1%	
岐阜県	岐阜	岐阜	岐阜	岐阜	20.1%	
静岡県	静岡	静岡	静岡	静岡	20.1%	
愛知県	名古屋	名古屋	名古屋	名古屋	20.1%	
大阪府	大阪	大阪	大阪	大阪	20.1%	
兵庫県	神戸	神戸	神戸	神戸	20.1%	
奈良県	奈良	奈良	奈良	奈良	20.1%	
和歌山県	和歌山	和歌山	和歌山	和歌山	20.1%	
徳島県	徳島	徳島	徳島	徳島	20.1%	
香川県	高松	高松	高松	高松	20.1%	
愛媛県	松山	松山	松山	松山	20.1%	
高知県	高知	高知	高知	高知	20.1%	
福岡県	福岡	福岡	福岡	福岡	20.1%	
佐賀県	佐賀	佐賀	佐賀	佐賀	20.1%	
熊本県	熊本	熊本	熊本	熊本	20.1%	
鹿児島県	鹿児島	鹿児島	鹿児島	鹿児島	20.1%	
沖縄県	那覇	那覇	那覇	那覇	20.1%	
合計						270,600円
負担率						27.06%
予算配賦額						16,110円
負担額						6,380円

備考

昭和十四年度職業紹介所三箇スル経費地方負担額道府縣別調(其三)

概算見込

道府縣	職業紹介所	事業應	経費基本額	負担額	備考
徳島	道	1	497.1	890.0	
青森	森	1	457.6	680.0	
岩手	手	1	631.0	900.0	
宮城	城	1	742.2	1000.0	
秋田	田	1	742.2	1000.0	
山形	形	1	742.2	1000.0	
福島	島	1	742.2	1000.0	
茨城	城	1	742.2	1000.0	
栃木	木	1	742.2	1000.0	
群馬	馬	1	742.2	1000.0	
埼玉	玉	1	742.2	1000.0	
千葉	葉	1	742.2	1000.0	
東京	京	3	742.2	1000.0	
神奈川	川	1	742.2	1000.0	
新潟	新	1	742.2	1000.0	
富山	山	1	742.2	1000.0	
石川	川	1	742.2	1000.0	
福井	井	1	742.2	1000.0	
山梨	梨	1	742.2	1000.0	
長野	野	1	742.2	1000.0	
岐阜	阜	1	742.2	1000.0	
静岡	岡	1	742.2	1000.0	
愛知	岡	1	742.2	1000.0	

三	滋	京	大	天	奈	和	鳥	島	岡	山	德	香	榮	高	福	佐	長	熊	大	宮	麻	沖	保	計
實	賀	和	阪	庫	長	山	取	根	山	島	口	島	川	段	知	賀	崎	本	分	崎	島	繼	額	
一	一	三	三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二
七	八	九	二	九	七	八	七	七	八	八	八	七	八	七	九	八	七	八	七	七	七	七	六	五
四	五	六	一	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	二
八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	一
三	六	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五
九	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	五
三	六	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五
九	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	五
三	六	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五
九	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一	五

九

昭和十三年及職業紹介所ニ関スル経費負担命令状況

科目別	経費及負担額		負担率	地方負担命令額		全上ノ分内		全上道在縣卜市町村ノ分担割合
	経費	負担額		道	府	市	町	
職業紹介所経費	三、五六〇、〇六七	一、三三四、四二〇	0.375	八八八、八一〇	八〇三、八〇四	道	府	五五
職業紹介所費	一、七七七、六一一	八八八、八一〇	0.50	追(九二九、三三四)	八〇三、八〇四	道	府	五五
經常部	一、七八二、四四六	追(四六、四六七)	0.25	四四五、六一〇	八〇三、八〇四	道	府	五五
臨時部	追(九二九、三三四)	追(九二九、三三四)	0.25	追(三三、三三四)	八〇三、八〇四	道	府	五五
講習費	二九七、六九〇	七四、五〇〇	0.25	三六六、九七五	八〇三、八〇四	道	府	五五
職業紹介事業諸費補足	一、〇三三、九三二	三六六、九七五	0.375	一、七九五、八九五	八〇三、八〇四	道	府	五五
小計	四、八八九、六八九	一、七九五、八九五	0.37	二、〇四八、八三〇	八〇三、八〇四	道	府	五五
國民登録諸費	八一九、三三〇	二〇四、八三〇	0.25	二七〇、三八八	八〇三、八〇四	道	府	五五
失業対策諸費	一、八五九、六〇〇	四六四、九〇〇	0.25	二七〇、三八八	八〇三、八〇四	道	府	五五
雇傭者規制諸費	三、四三〇	八六〇	0.25	八六〇	八〇三、八〇四	道	府	五五
合計	七、五七二、〇四九	二、四六六、四八五	0.325	一、四五九、四八二	一、〇〇六、九九三	道	府	四一

職業紹介法中改正法律案

職業紹介法中左ノ通改正ス

第七條 削除

第十四條中「町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ」ヲ削ル

附則

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

職業紹介法中改正法律案理由書

職業紹介所ノ事務ノ現況ト地方負擔トノ關係ニ鑑ミ職業紹介所及聯絡委員ニ關スル費用ノ地方負擔ヲ廢止スル爲職業紹介法中改正ヲ要スルモノアリ是レ本案ヲ提出スル所以ナリ

厚甲 二七

昭和十五年三月二十六日

内閣書記官長

内閣書記官

昭和十五年三月三十日
昭十五内三三三
昭十五内三三三

内閣總理大臣 五

法制局長官

外務大臣

五

陸軍大臣

五

文部大臣

五

逓信大臣

五

厚生大臣

五

内務大臣

五

海軍大臣

五

農林大臣

五

鐵道大臣

五

大藏大臣

五

司法大臣

五

商工大臣

五

拓務大臣

五

別紙厚生大臣請議職業紹介法施行

令中改正ノ件

ヲ審査スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ通

一三

法制局

閣議決定セラレ可然ト認ム

勅令案

朕職業紹介法施行令中改正ノ件ヲ裁
可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十五年 三月二十九日

内閣總理大臣

厚生大臣

呈案附箋ノ通

法制局厚第一七號

昭和十五年三月十六日

厚生省發職第二二號

昭和十三年^六月勅令第四百四十九號職業紹介法施行令中別紙勅令案ノ通改正致度
右閣議ヲ請フ

昭和十五年三月十五日

厚生大臣

吉

田

茂



本件ハ職業紹介法中
改正法律ト同日公布
相成度
以後
法制

内閣官房總務課

中

厚甲一七

厚三官

此ノ件關係主任官
厚生書記官 青木重臣



并



勅令第百二十六號

職業紹介法施行令中左ノ通改正ス

第二條 ^{第九}削除

第三條 ^{第九}削除

附則第二項ヲ削ル

附則

本令ハ昭和十五年四月一日、
ヨリ之ヲ施行ス

職業紹介法施行令改正の理由書

本年法律第六十一號職業紹介法、施行ニ伴ヒ改正ノ要アルニ依ル

事
上
省

朕職業紹介法施行令改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

昭和十三年六月二十八日
内閣總理大臣 公爵 近衛 文麿
厚生 大臣 侯爵 木戸 幸一

勅令第四百四十九號 (官報 六月二十九日)

職業紹介法施行令

第一條 職業紹介法第五條ノ規定ニ依リ市ヲ指定スルコト左ノ如シ
東京市 京都市 大阪市 横濱市 神戸市 名古屋市

第二條 職業紹介法第七條第一項ノ規定ニ依リ道府縣ヲシテ負擔セシムベキ職業紹介所及聯絡委員ニ關スル費用ハ其ノ道府縣ノ區域ニ設置シタル職業紹介所及聯絡委員ニ關スル經費ノ二分ノ一以內ニ於テ厚生大臣之ヲ定ム

第三條 地方長官職業紹介法第七條第二項ノ規定ニ依リ道府縣ノ負擔スル費用ノ一部ヲ負擔セシムル市町村ハ其ノ區域ニ職業紹介所ノ設置セラレタル市町村ニ限リ且其ノ負擔額ハ當該市町村ノ區域ニ設置セラレタル職業紹介所ニ關スル經費ニ付道府縣ノ負擔スル金額ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ超ユルコトヲ得ズ但シ特別ノ事情アル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 道府縣市町村ハ職業紹介所ノ紹介ニ依リ就職スル者ニ對シ其ノ者ノ現在地ヨリ就職地ニ到ル旅費、支度金其ノ他就職ニ關シ必要ナル費用ノ全部又ハ一部ヲ貸付スルコトヲ得

道府縣市町村ハ職業紹介所ノ紹介ニ依リ雇傭セラレタル日傭労働者ニ對シ豫メ當該雇傭者ノ委託ヲ受ケ北海道地方費、府縣費又ハ市町村費ヲ以テ賃銀ノ一時繰替ヲ爲スコトヲ得

第五條 町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本令中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

附則

本令ハ昭和十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス



當分ノ内厚生大臣ハ特別ノ事情アル道府縣
ニ限リ第二條ノ規定ニ拘ラス職業紹介所及
聯絡委員ニ關スル費用ノ一部ヲ負擔セシム
ルコトヲ得

日本標準規格B4列(十一行全)

職業紹介法改正法律

昭和十三年四月
法律第六十號
（總理 厚生
大臣 署名）



59

職業紹介法

第一條 政府ハ勞務ノ適正ナル配置ヲ圖ル爲本法ニ依リ職業紹介事業ヲ管掌ス

第二條 何人ト雖モ職業紹介事業ヲ行フコトヲ得ズ

第三條 政府ハ職業紹介事業ニ併セテ職業指導及必要ニ應ジ職業補導其ノ他職業紹介ニ關ス

ル事項ヲ行フモノトス

前項ノ規定ニ依ル職業紹介及職業指導ハ之ヲ無料トス

第四條 政府ハ前條ニ規定スル事業ヲ行フ爲職業紹介所ヲ設置ス

職業紹介所ノ業務ヲ補助セシムル爲職業紹介所ニ聯絡委員ヲ置ク

職業紹介所及聯絡委員ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 市町村長(勅令ヲ以テ指定スル市ニ在リテハ區長)ハ命令ノ定ムル所ニ依リ職業紹介

所ノ業務ノ一部ヲ行フ

第六條 第三條ニ規定スル事業ニ關シ職業紹介委員會ヲ置ク

職業紹介委員會ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 職業紹介所及聯絡委員ニ關スル費用ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ道府縣ヲシテ其ノ一部ヲ負擔セシムルモノトス

地方長官必要アリト認ムルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ前項ノ規定ニ依リ道府縣ノ負擔スル費用ノ一部ヲ市町村ヲシテ負擔セシムルコトヲ得

第八條 勞務供給事業ヲ行ハントスル者又ハ勞務者ヲ雇傭スル爲勞務者ノ募集ヲ行ハントスル者ニシテ命令ノ定ムルモノハ地方長官(東京府ニ在リテハ東京府知事及警視總監トス)ノ許可ヲ受クベシ

前項ノ勞務供給事業及勞務者ノ募集ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ六月以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

- 一 第二條ノ規定ニ違反シ有料又ハ營利ヲ目的トスル職業紹介事業ヲ行ヒタル者
- 二 第八條ノ規定ニ依ル許可ヲ受ケズシテ有料又ハ營利ヲ目的トスル勞務供給事業ヲ行ヒタル者

第十條 第八條ノ規定ニ依ル許可ヲ受ケズシテ勞務者ノ募集ヲ行ヒタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ拘留ニ處ス

第十一條 法人又ハ人ノ代理人、使用人其ノ他ノ從業者ガ其ノ法人又ハ人ノ業務ニ關シ前條ノ違反行爲ヲ爲シタルトキハ其ノ法人又ハ人ハ自己ノ指揮ニ出デザルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ズ

第十二條 本法ノ罰則ハ其ノ者ガ法人ナルトキハ理事其ノ他ノ法人ノ業務ヲ執行スル役員ニ、未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ其ノ法定代理人ニ之ヲ適用ス但シ營業ニ關シ成年者

ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十三條 前二條ノ場合ニ於テハ懲役又ハ拘留ノ刑ニ處スルコトヲ得ズ

第十四條 町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本法中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノ

ニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

第十五條 第二條ノ規定ハ主務大臣ノ指定スル職業ノ職業紹介事業ニハ之ヲ適用セズ

前項ノ職業紹介事業ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 本法ハ船員職業紹介事業ニハ之ヲ適用セズ

附則

第十七條 本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 従前ノ規定ニ依リ設置シタル職業紹介所ニ付テハ本法施行ノ日ヨリ一年ヲ限り職業紹介委員會ニ關スル規定ヲ除キ仍従前ノ例ニ依ル

第十九條 地方長官ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ前條ノ職業紹介所ノ廢止ヲ命ズルコトヲ得

第二十條 本法施行ノ際現ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケ職業紹介所ヲ設置スル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當分ノ内無料ノ職業紹介事業ヲ行フコトヲ得

第二十一條 本法施行ノ際現ニ行政官廳ノ許可ヲ受ケ有料又ハ營利ヲ目的トスル職業紹介事業ヲ行フ者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ引續キ其ノ事業ヲ行フコトヲ得

前項ノ職業紹介事業ノ施設ヲ相續ニ因リ承繼シタル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ地方長官（東京府ニ在リテハ東京府知事及警視總監トス）ノ許可ヲ受ケ其ノ事業ヲ行フコトヲ得此ノ場合ニ於テハ相續開始ノ日ヨリ一月以内ニ許可ヲ申請スベシ

前項ノ者ハ前項ノ申請ニ對スル許可又ハ不許可ノ處分アル迄其ノ事業ヲ行フコトヲ得

第二十二條 本法施行ノ際現ニ第八條ノ規定ニ依リ許可ヲ受クベキ勞務供給事業又ハ勞務者ノ募集ヲ行フ者ハ本法施行後二月以内ニ地方長官（東京府ニ在リテハ東京府知事及警視總

監トスニ許可ヲ申請スベシ

前項ノ者ハ前項ノ申請ニ對スル許可又ハ不許可ノ處分アル迄其ノ事業又ハ募集ヲ行フコトヲ得